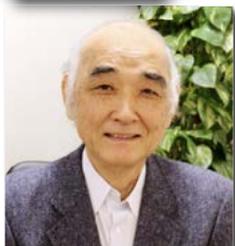




一般社団法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会第10期役員挨拶

代表理事

「新たに代表理事に推薦されて」 長谷川幹（世田谷公園前クリニック）



2009年に当学会が発足し、2015年に一般社団法人となり代表理事を務めて参り、2023年度から2名の代表理事、3名の副代表理事体制になっていますが、委員会の休止のこともあり、学会全体として世代交代は十分に進んでいません。

コロナ禍明けの2023年度以降対面での全国大会が沖縄大会、東京大会、広島大会と続き充実した発表、議論ができました。定款の障害のある人となない人が「同じテーブルで議論し実践する」の基本理念と合致しています。そして、会員に新たに多くの方が参加し世代交代の兆しは出ています。最後に、学会をさらに発展していくために皆様のご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

細田満和子（星槎大学）



このたび、日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会の代表理事を務めさせていただくことになりました。大きな役割をいただき、身の引き締まる思いと同時に、皆さまと共に歩んでいけることへの喜びを感じております。脳損傷と向き合う日々は、当事者やご家族にとって決して平坦なものではありません。しかし、その道のりを支える仲間（ピア）がいることで、希望や安心が生まれます。本学会は、専門家だけでなく、当事者やご家族も含めた“つながり”の場です。ケアの輪をさらに広げ、誰もが安心して暮らせる共生社会を皆さまと一緒に築いていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

副代表理事

岡本隆嗣（西広島リハビリテーション病院）



6月の広島大会では多くの当事者や支援者の皆さまにご登壇いただき、おかげさまで盛況のうちに無事終えることができました。ご参加・ご支援下さった皆さまに、心より感謝申し上げます。大会終了後は、当事者の方々だけでなく、サポートした実行委員のスタッフにも変化が見られました。大会テーマの「ともに歩み、あすを拓く」が少し実現できたように感じ、とても嬉しく思っています。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

後藤博（第一生命経済研究所）



脳損傷者・当事者の一人でありませう後藤です。障害をもってからの気づきは、一人ひとりの心の中にあり、日々の活動のなかで生まれます。その気づきを、自分のものだけでなく、会員で共有し、さらに大きな安心の力に変えていきたいと思っております。皆様と力を合わせ、より良い私たちの会へと続くよう、精一杯努めてまいります。どうぞ、よろしくお願いいたします。共に「気づきの輪を共有しよう、伝えよう、広めよう！」

中村千穂（高次脳機能障害の子供を持つ家族の会ハイリハキッズ）



子どもの家族会活動を行って18年になります。成人となった当事者やきょうだいが自身の経験や思いを語ってくれるようになりました。今後も本学会において、それぞれの思いや願いを語り合い、明日を生きる希望や活力につながる活動を続けていきたいです。また、これからの子どもたちとその家族が心身共々たくましく成長していけるよう尽力してまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

第14回広島大会を振り返って

「ともに歩み、あすを拓く」

大会長 岡本隆嗣（西広島リハビリテーション病院）



6月21日・22日に開催した「日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 広島大会」は、おかげさまで無事終了し、最終的な参加人数は298名となりました。ご参加・ご協力下さった皆さまに、スタッフ一同、心より感謝申し上げます。

今回の大会テーマは「ともに歩み、あすを拓く」でした。「あすを拓く」は当法人の理念でもあり、挑戦を意味する言葉です。昨年の東京大会での経験を踏まえ、広島大会ではより多くの当事者に発表の機会を持っていたらこうと、失語症の方によるスピーチや作品披露のワー

クショップなど、挑戦的な企画にも取り組みました。

発表の中で、「最初はうまくいかなかったが、試行錯誤するうちに片手でもできるようになった」「障害はあるけれど、やってみると出来ることはたくさんある」といった言葉が強く心に残りました。終了後には、「発表させてもらえて良かった。ありがとう。」と多くの登壇者から感謝の言葉を頂きました。挑戦や参加の場は、探してそこをお願いするだけでなく、「ともに」作り上げていくことも大切であることを学びました。

人はある日突然、当たり前前にできていたことを失い、日常を奪われることがあります。喪失感で心は深く傷つき、前を向くことすら難しくなります。それでも、そこから再び一歩を踏み出そうとする人たちがいます。その姿は周囲に勇気を与え、深く心を打ちます。前を向くまでの道のりは決して平坦ではありませんが、今回の登壇者のスピーチは、どれもその一言一言に人間の持つ力が込められた、素晴らしいものでした。

今後、多くの医療・介護関係者にも、ぜひこのような場を体験して頂きたいと願っています。ありがとうございました。



田中貴史さん（実行委員）



1日目司会：日下昭雄さん



2日目司会：中本千鶴さん

実行委員会のメンバーとして活動を始めた当初は、まずは当事者に参加をしていただかないことには成立しないという不安な思いが強かったと記憶しています。当事者が物怖じせず参加してくれるだろうかという不安（心配）でした。そのため、是非、参加してほしいと考えていた当事者への声掛けには、警戒感を持たれないよう、慎重に言葉を選びながら大会の主旨や内容、おおよその参加人数などを説明することに努めました。

しかし、心配はすぐに驚きと安心（取り越し苦労）に変わりました。当事者の方々は私が思っていたよりも人生にパワフルで、とても前向きでした。当事者と一緒に準備を行うことで、障害をもちながら生きることの教科書では教えてもらえない、当事者の本心に触れることができたと感じています。また、ピアサポートなどの周囲のサポートする方々の本気度を知ることもできました。

大会を振り返ると、自分自身の未熟さ（無知さ）を痛感する出来事だったと感じます。それは、病院外の情報の乏しさ、当事者の心情の無知、具体的に障害を持ちながら生活していくことへの知識不足です。今は、もう一度、当事者と一緒に何かを行うことに携わりたい、再び、当事者のいきいきとした顔を見たいと思っています。

2026年度大会は東京開催です。
皆様のご参加をお待ちいたします。



登壇者の感想

采野芳美津さん（ポスター発表者 / 当事者・失語症者）

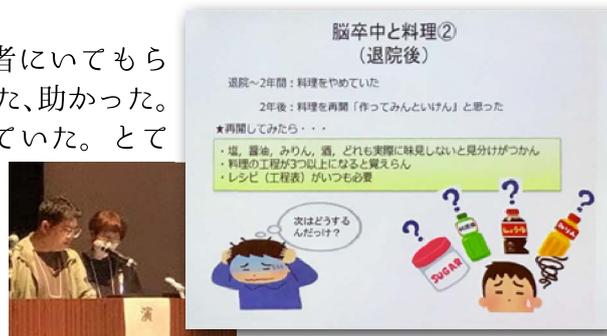
全体の感想として一言では「良かった」と感じている。

当日のポスター発表については、発表原稿に集中しないと何が何だかわからなかったのが原稿を読むことに集中していた。原稿から目を離すとどこを読んでいるか分からなくなる。そして立って発表したのが原稿を読むことだけで精一杯だった。でも、本心はもっと自分の言葉でユーモアを交えながら自由に発表したかった、くやしかった。

1人で発表するのは不安だと思ったけど、隣に失語症支援者にいてもらえたから安心できた。隣に誰かおってもらわんといいんと思った、助かった。

発表した後、舞台袖に戻ってすぐは、とても疲れたと感じていた。とても眠たかった。そして精神的に疲れたと感じた。それでも、また同じような機会があれば是非発表したい。そして、他の当事者のポスター発表を聞いて「すごい」と思った。

振り返って残念だったことは、多くの失語症者の方々と交流ができると期待していたが、思っていたよりも失語症者同士の交流が少なかった。失語症のある同年代（30-50歳代）の人とも交流を持ちたい。失語症者を家族に持つ家族同士の集まりがあっても良いと思う。家族同士で話すことで愚痴を言ったり、情報交換ができるのではないかなと思う。



采野さんの妻（当事者の妻）

参加させていただきありがとうございました。本人にとっても家族にとっても得がたい経験になり本当に感謝しております。自分がやってきたことが認められ、人に知ってもらえることが良い刺激になりました。ありがとうございました。

山口公美子さん（左手でピアノ演奏）



本番当日は自宅で繰り返し練習を行って臨みました。当初は緊張していましたが、開催に向けて事前に顔合わせができていたことや、会場の和やかな雰囲気のおかげで安心して本番に臨むことができました。また、ピアノの移動など準備の迅速さに驚き、スタッフの方々の対応力に感謝しています。

懇親会では、スタッフの方々や発表者の方が自分のことを覚えてくださり、温かい気持ちを感じることができました。名刺交換も活発で、予想以上に多くの方と交流できたことで今後の活動への意欲が高まり、感謝の気持ちも強く感じています。

すぐに生活が大きく変わるわけではありませんが、学会への参加で自身の活動を広げるためのきっかけとなる人脈が築けたと思います。今回の経験は、自分にとって大きな財産となり、今後の成長につながる貴重な機会でした。

このような機会を頂いたことに感謝し、更なる成長ができる様に日々励んでいきたいと思ひます。



ポスター発表



1 私にとっての料理 ～体験談～	采野芳美津
2 乗馬との出会いと取り組みの報告	三浦伸吾
3 もう一度、フェアウェイへ -脳梗塞から"100切り"への挑戦- ～雲外に蒼天あり～	丸尾忍
4 高次脳機能障害者自助グループ活動の意義と効果 ～出雲 縁ing トークの会の立ち上げから今日まで～	祝部英明 黒目裕策
5 高次脳機能障害にまつわるマイクロアグレッションの文献検討 ～無意識の偏見と向き合うケアリング・コミュニティのために～	大下琢也
6 地域密着型通所介護から広がるケアリング・コミュニティ～"イケオジ"の極意～	山岸麻野
7 デンマークにおける脳損傷者のピアサポートとアドボカシー活動 -デンマーク脳損傷者協会を訪ねて-	細田満和子 長谷川志帆
8 ピアサポートの価値創造と普及による新しい医療社会モデル構築に向けた展開	西條寧音

2024年、デンマーク脳損傷者協会を訪ねて

長谷川 志帆（ソーシャルワーカー）

海外では、失語症を含む高次脳機能障害者は brain injury survivors（脳損傷サバイバーズ）と表現されることがあります。「サバイバー」という言葉には生き延びたことの重みが含まれています。死と隣り合わせの危機や様々な喪失を経験し後遺症を持ち、「どうして私が」という問いの中に放り込まれる過程で、自分の内なる力や仲間を再発見しながら生き延びた人。それがサバイバーです。

高次脳機能障害の症状や困難は多種多様であり、社会の理解が十分でないために、原因や対策がわからず自分を責める家族や当事者は多い状況にあります。このような見えない苦労はもちろんのこと、仲間との出会いと支え合いが生きる希望になるという事実を広めたい、と奮闘してきました。



そんな中、私が海外渡航の中で訪ねたのがデンマーク脳損傷者協会でした。デンマークは、社会民主主義／高税高福祉制度を背景に、社会的に弱い立場の人を国が支えるという価値に根ざした国です。地下鉄や電車には広告はほとんどなく無音で、低刺激を求める人向けの車両もあります。至る所にベンチがあり、疲れにくいよう街が設計されています。

拙い英語で予約を取り、若者のピアサポート事業〈若い脳〉を担当する Stine 氏と対面。日本の約 1/20 の人口のデンマークで、日本で把握されている数と同等の患者数が把握されている事（日本ではあまりに見過ごされている事実）にまず驚かされました。Stine 氏からは、アドボカシー活動（社会への普及啓発活動）とピアサポート（当事者同士で表現できる場作り）が大事だという話があり、団体につながれない当事者へも届くようオンラインの情報発信も工夫されていました。HP (<https://www.ungebjergner.dk/>) も参照いただければと思いますが、一人ひとりの人生に役立つような情報や居場所、相談支援を心がけていることが大変印象的でした。

活動内容(2)

複数の〈ピア〉グループの運営

- ①若い脳：16～35歳
- ②就労世代：30～65歳
- ③シニア：60歳以上
- ④水頭症経験者と家族
- ⑤パートナーや配偶者（離婚後も含む）
- ⑥きょうだい（13～30歳）
- ⑦脳損傷の親のいる子ども（13～30歳）
- ⑧脳損傷を経験した子ども（～35歳）のいる親
- ⑨若年女性（18歳～40歳）



自主グループ活動紹介コーナー

兵庫県脳卒中者友の会「あけぼの会」の活動紹介

今枝 睦広

1 「あけぼの会」の成り立ち

「あけぼの会」は1982年（昭和57年4月）、当時の兵庫県立リハビリテーション中央病院の病院長であられる澤村誠志先生の絶大なる支援を受け、初代会長である山本博繁氏が設立した会であります。設立時の結成総会には、300余名の方々が参加されたそうです。

2 現在の活動状況

活動状況については、4月に総会、5月にパターゴルフ大会、6月にBBQ大会、9月に運動会、10月にバス旅行、11月にパターゴルフ大会、12月に忘年会を行っております。また、奇数月に「あけぼの会ニュース」を発行しております。

3 今後の課題

このことについては、何といたっても会員数の減少に歯止めをかけ、会員を増やすことです。



【新広報委員紹介】

鈴木 倫（言語聴覚士）

広報活動を通じ学会発展に尽力します。宜しくお願い致します。

西條 寧音（介護職）

多くの方にケアコミの存在が広まるよう努めてまいります。よろしくお願い致します。

編集後記

こうして各地域での活動を見ていると、皆さん人生を生き抜く為に障害と戦っているというより、障害とどう共存して笑顔を増やすかが大事なのかなぁと感じました。高次脳機能障害と共存し、ケアコミ学会や自主グループで情報を共有して、皆それぞれの笑顔が生み出されて行く。素敵だなぁと思いました。

苦しい事が多い時もありますが、そんな時こそ「笑顔」が一番の『武器』になるのかな。そう思います。

これからもどんどん各地の情報を知り、そして色々な当事者会と交流してみたいなぁ…

と感じました。

荒井 隆浩